



第1期 図書館所蔵の
国宝・重要文化財

3.17[fri] ▶ 4.5[wed]

早稲田大学中央図書館

開館25周年記念展示

[会場] 早稲田大学総合学術情報センター 2階展示室 10:00 ▶ 18:00

※日曜・祝日は閉室。ただし、3月26日、4月2日は開室(17:00まで)

第2期 日本の古籍を
中心に

4.10[mon] ▶ 4.27[thu]



第3期 海を越えてきたもの

5.10[wed] ▶ 6.2[fri]

[主催] 早稲田大学図書館

開催にあたって

早稲田大学中央図書館開館25周年記念展示実施委員会

1991年4月の中央図書館開館以来、四半世紀が過ぎた。この間、中央図書館では、収蔵する貴重資料について、教育や保存を目的に、データによる画像公開事業を進め、高い評価を得てきた。だが、その一方で、貴重な資料そのものを観たいという声が、少なからず寄せられていたことも確かであった。そこで今回、開館25周年を記念して、館蔵資料のうち選りすぐりの品々を展示する。およそ10年ぶりの公開となる国宝をはじめ、長らく展観に付することができなかった“名品”の数々を、3つのテーマに分けて皆様にお届けしたい。

第1期(2017年3月17日～4月5日) 図書館所蔵の国宝・重要文化財

指定文化財のうち国宝2点、重要文化財5件を一堂に集める。このうち『礼記子本疏義 第59』は、初代館長・市島謙吉が、宮内大臣・田中光顕より明治38年に寄贈を受けたものであり、一方の『玉篇 巻第9』は、大正3年の秋に、その謝辞を述べるべく田中伯を訪ねた際、寄贈の申し出を受けたという逸話をもつ。重要文化財からは、日本古文学書の泰斗、本学名誉教授荻野三七彦の収集にかかる「荻野研究室収集文書」の『尾張国郡司百姓等解文』や、第4代館長・岡村千曳がその収集に努めた「洋学文庫」の「大槻玄沢関係資料」など、歴史上重要な資料を公開する。

第2期(2017年4月10日～4月27日) 日本の古籍を中心に

和古書の名品を中心に展示を行う。中央図書館では昨年、初めての理系館長である深澤良彰を発起人として、『敦盛絵巻』と『源氏物語絵巻』をバーチャルリアリティー(VR)動画とし、3D映像でみせる試みを行った。今回は、そのVRの元となった実物をご覧いただく。このほか室町物語『しら露』は、他に伝存をみず、まさに中央図書館でしか見られない稀覯書であり、また2015年に購入し、当館所蔵の二葉亭四迷資料として新たに加わった『二葉亭四迷日記:ロシア滞在期』は、今回が初めての公開となる。

第3期(2017年5月10日～6月2日) 海を越えてきたもの

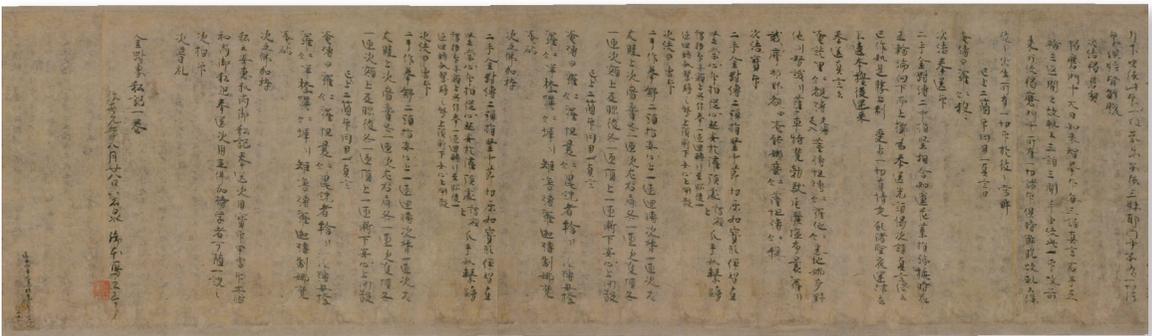
中央図書館では諸外国の貴重書・古書や、海外との文化交流を通して育まれた洋学関係の資料も積極的に収集してきた。これらを「海を越えてきたもの」と題して展覧の場を設ける。漢籍からは、史料性のみならず、美観にも優れた宋版のうち『一切経音義』を、洋書からは、15世紀前半にヨークシャーで制作され、当時の豪華な意匠をとどめる『イエス・キリストの祝福されし生涯の鏡』などを展示する。

25周年の節目に伴い、傷みが目立ちはじめていた図書館展示室も全面的にリニューアルした。装いも新たなこの場所で、資料収集の歴史の一端と、貴重な原資料が持つ確かな存在感をご堪能頂ければ、望外の喜びである。



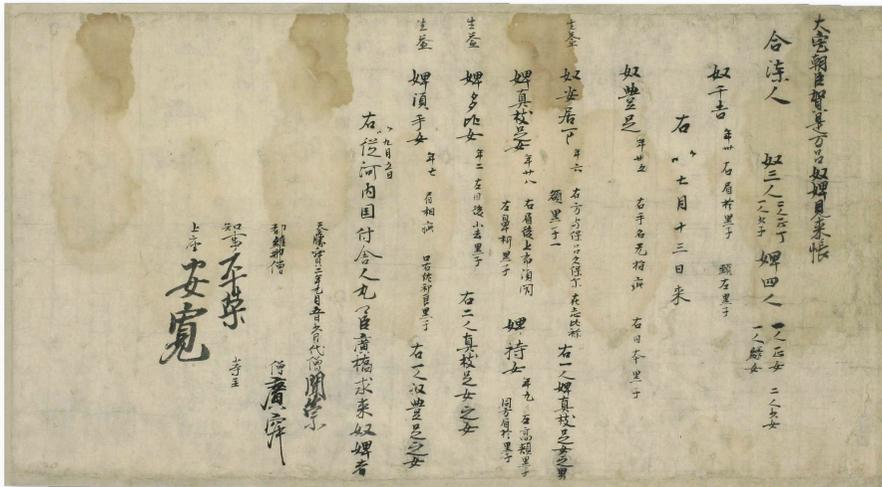
上段: 国宝 (左) 礼記子本疏義 第59 (右) 玉篇 卷第9

下段: 重要文化財 (左上) 東大寺薬師院文書 (右上) 尊勝寺領近江国香庄文書
(左下) 崇光上皇宸筆願文 (右下) 尾張国郡司百姓等解文



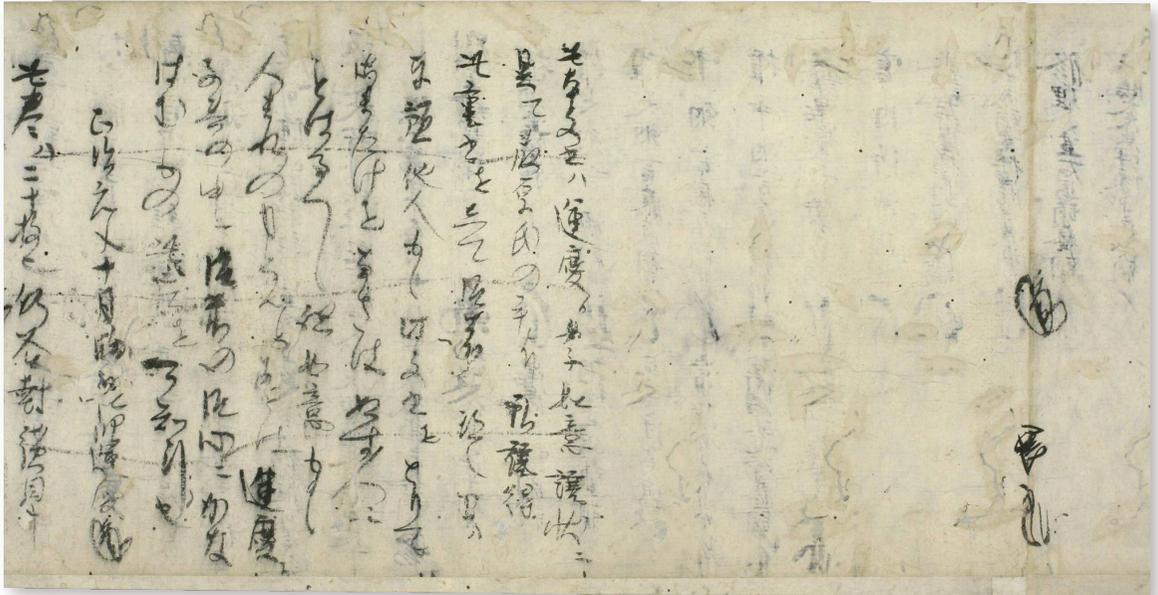
玉篇 卷第9 ホ4 2555
梁・顧野王撰 唐代写本 国宝 1巻

梁・大同年間(535—545)に成立した中国の最も古い字書の一つ。その後たびたび改修の手が加えられ、宋代に刊行された。しかしその間に原本玉篇は中国では散逸し、零本として日本にのみ伝存することとなった。本資料は原本の体裁をうかがわせる貴重な唐代の写本である。他の残巻としては高山寺蔵の第27巻等が知られるが、それら各残巻の関係性については不明である。



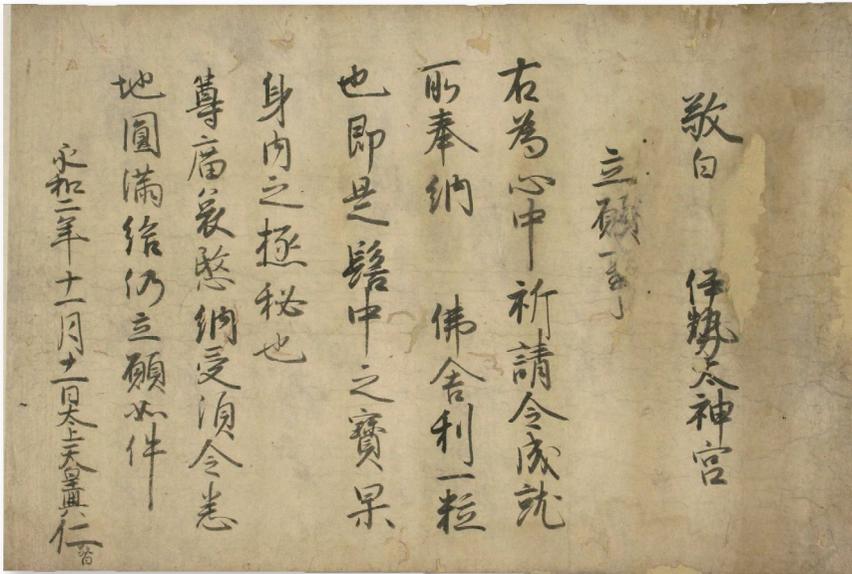
大宅朝臣賀是万呂奴婢見来帳
 リ5 3740 1
 天平勝宝2年(750)9月5日 重要文化財
 (東大寺薬師院文書のうち) 1通

東大寺薬師院は明治に入って廃寺となったが、その際、所蔵文書が外部に流出した。その一部(10巻15通)が田中光顕(1843—1939)の所有となり、大正3年に当館に寄贈された。本資料は、河内国(大阪府)から送られた奴婢が到着し、東大寺側がそれを受領したことを示す文書。一人ひとりについて、名前や年齢、身体的特徴などを記している。



法眼運慶置文 文庫1292(5)、
文庫1293(7)
運慶自筆 正治元年(1199)10月30日
重要文化財
(尊勝寺領近江国香庄文書のうち) 2通

尊勝寺領近江国香庄文書とは、尊勝寺(京都・白河、現存せず)の所領であった近江国愛知郡香庄(現在の滋賀県愛知郡愛荘町)の来歴を示した一連の文書群。その中でも本資料は、仏師運慶(?—1223)の自筆文書である。運慶の娘、如意が当地を養母より伝領する際、実父である運慶がその保証のため、裏書として記したもの。文書の継目裏に運慶の花押が見える。全体に横線三本が引かれているのは、この約定が反故となったことを示す。運慶の数少ない伝記資料として貴重である。



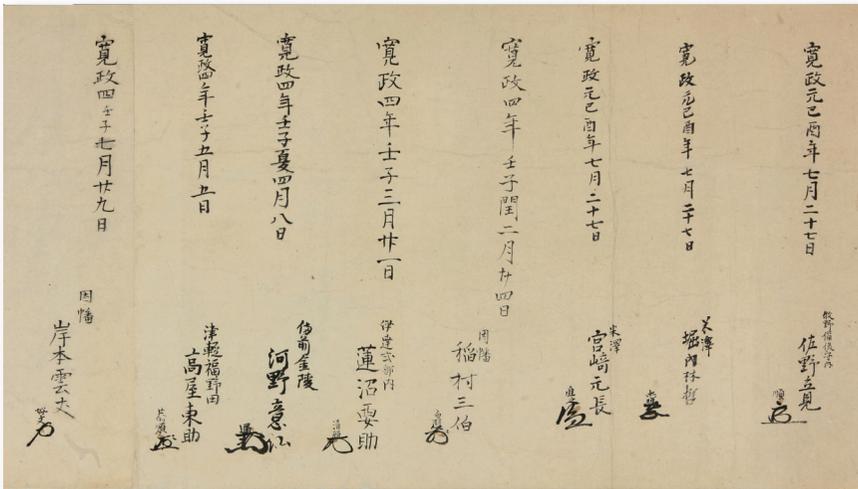
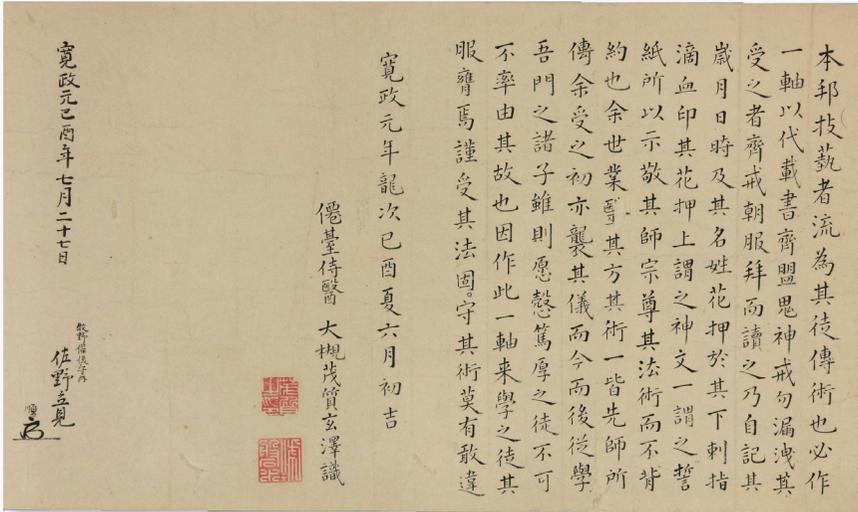
崇光上皇宸筆願文 文庫12 44
永和2年(1376)11月11日
重要文化財 1巻

崇光天皇(1334—1398)は、南北朝の動乱期に北朝方の天皇として貞和4年(1348)から観応2年(1351)まで在位した。この願文は、崇光天皇が退位した後、伊勢神宮に宛てて書いたもの。「仏舍利一粒」を奉納して立願した内容は、私事に関わることかと推測される。



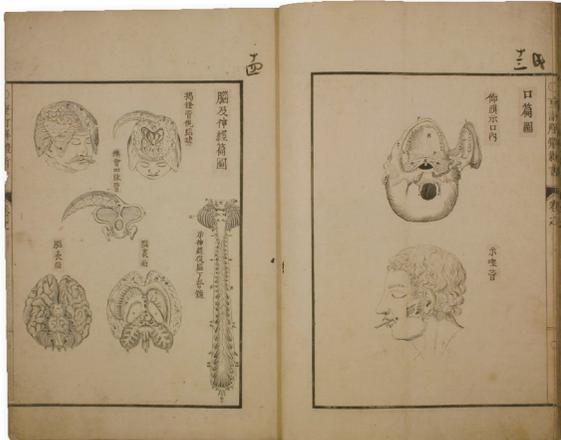
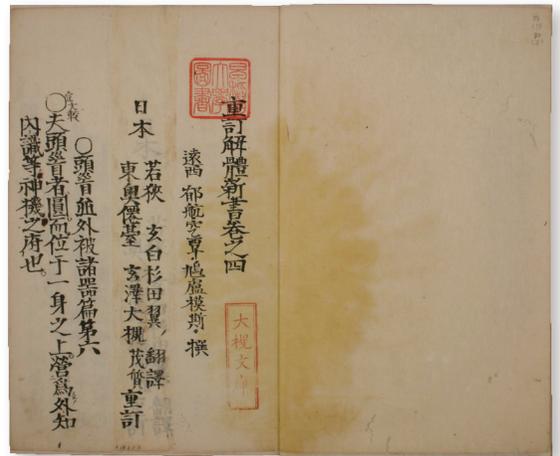
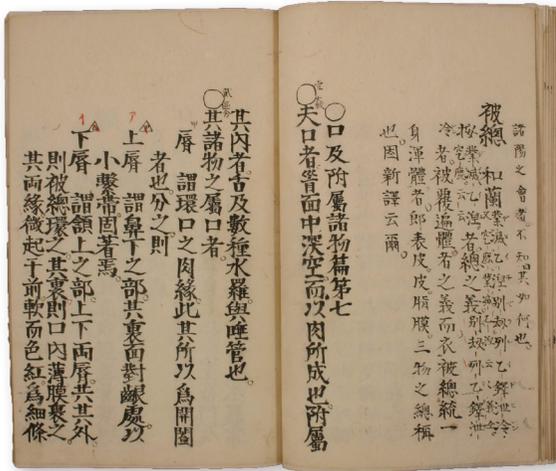
芝蘭堂新年会図 文庫8 A224
市川岳山画 諸家賛 寛政6年(1795)
重要文化財 1軸

寛政6年閏11月11日、西暦1795年元旦、蘭学者大槻玄沢(1757—1827)が開いた私塾「芝蘭堂」に蘭学者や蘭学愛好家が集まって、わが国で最初の西暦による新年を祝った。本図は、そのいわゆる「おらんだ正月」の祝会の模様を、杉田玄白(1733—1817)の門人で津藩の蘭学者、市川岳山(1760—1847)が描いたものである。



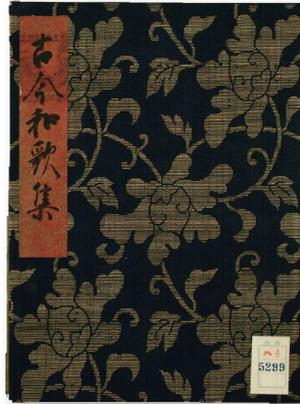
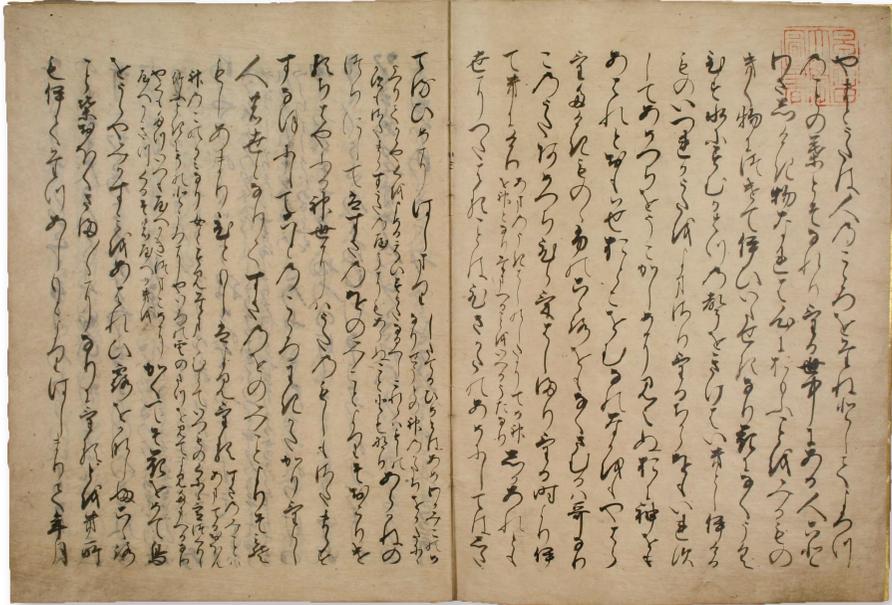
載書 大槻磐水門人姓名簿
 文庫8 A228
 寬政元年—文政9年(1789—1826)
 重要文化財 1卷

大槻玄沢の門人帳。「載書」とは誓約書の意。38年間にわたる入門者、計94名の姓名が、自筆で記録されている。橋本宗吉(1763—1836)、稲村三伯(1758—1811)、宇田川玄真(1769—1834)、山村才助(1770—1807)らの名前も見える。



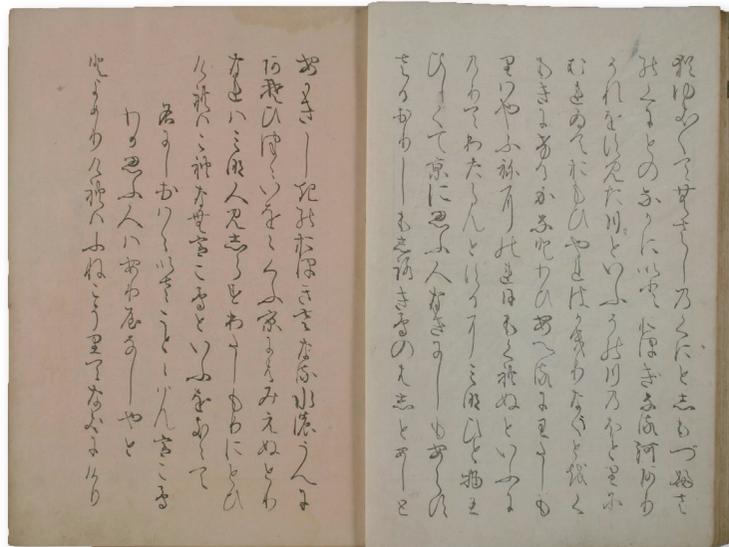
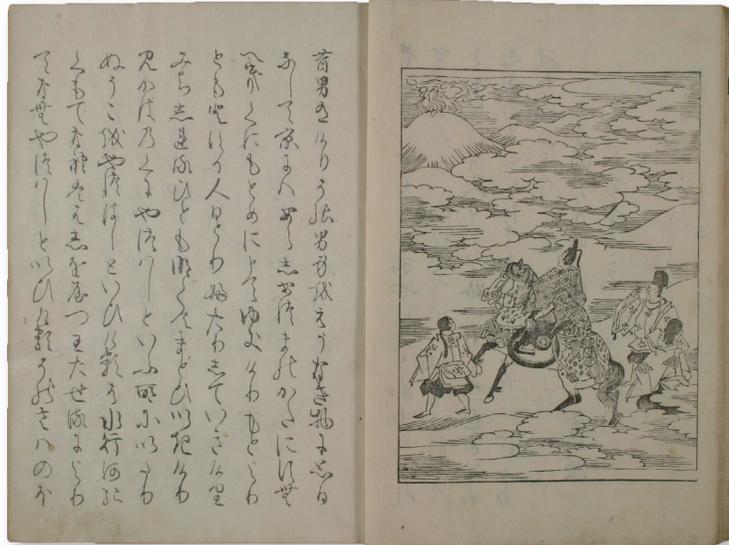
重訂解体新書 卷2-10並図編
 文庫8 A28、 文庫8 A29
 大槻玄沢自筆 江戸中期写
 重要文化財 9冊 図編1冊

杉田玄白が安永3年(1774)に刊行した『解体新書』の翻訳改訂は、弟子の大槻玄沢に委ねられた。三度の改稿を経て、寛政10年(1798)に完成し、刊行されたのは文政9年(1826)のことであった。本書は玄沢自筆の稿本であるが、定稿ではなく、刊本と比べると大きな異同が認められる。



古今和歌集 卷1-20 へ4 5299
紀貫之等撰 伝飛鳥井雅親写 1冊

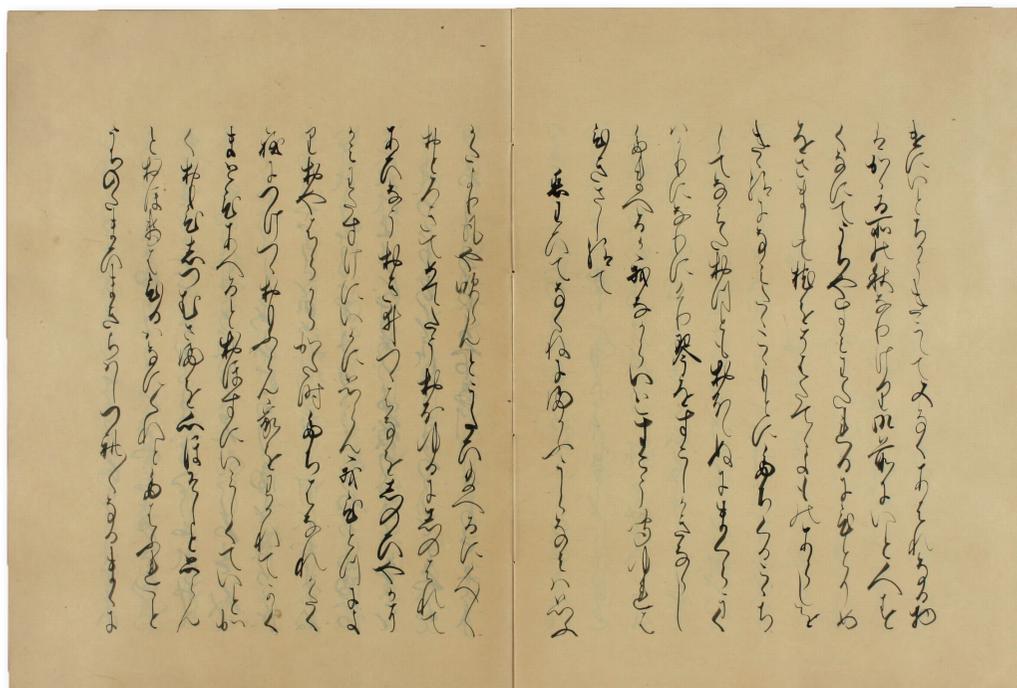
延喜年間(901—922)、醍醐天皇(885—930)の勅命によって編纂された我が国初の勅撰和歌集。短歌を中心に約1100首を、春、夏、秋、冬、恋、羈旅などの部立に従って配列する。本資料は室町時代の写本で、歌人・書家として著名な飛鳥井雅親(1417—1490)の手によるものと伝えられている。



伊勢物語 へ12 4353

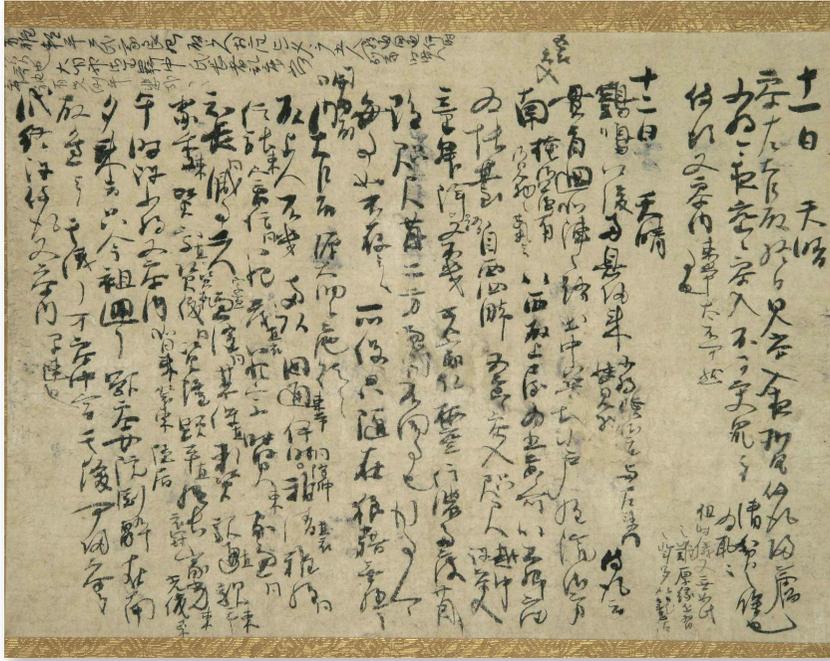
古活字版(嵯峨本) 慶長13年(1608)刊
1冊

平安前期を飾る歌物語の代表作。120余の短編から成っており、その多くが六歌仙の一人である在五中将、在原業平(825—880)に擬せられる人物を主人公とし、全体として、この男の一代記風の内容となっている。本書は江戸時代初期に出版された古活字本であり、挿絵を挟み、雲母引の色違いの料紙を特徴とする。



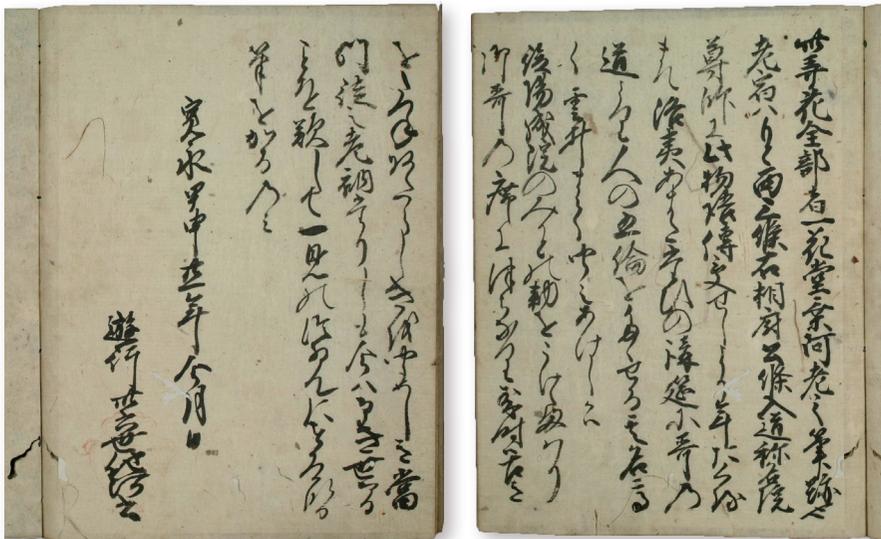
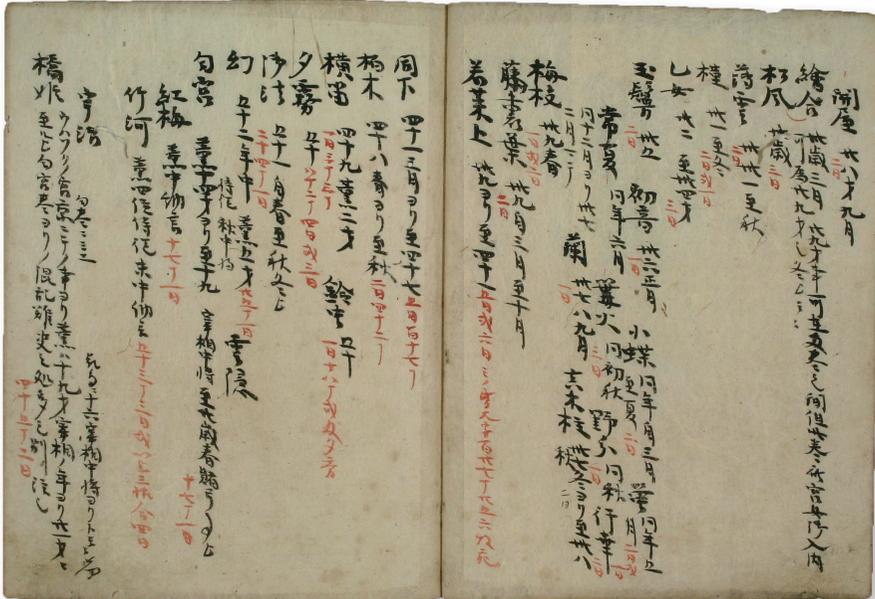
源氏物語 へ2 4867 51
 伝三条西実枝筆
 蒔絵匣入 54冊

「光源氏」を主人公とし、平安時代中期に成った平安文学の最高峰と言われる物語。一条天皇の中宮彰子(988—1074)に仕えた紫式部の作とされる。本書は室町時代の歌人・三条西実枝(1511—1579)の筆と伝える写本。華麗な菊花文様の高蒔絵がほどこされた小簞笥に収められ、大名や公家が娘の嫁入り道具として誂えたという、いわゆる「嫁入り本」の姿を伝えている。



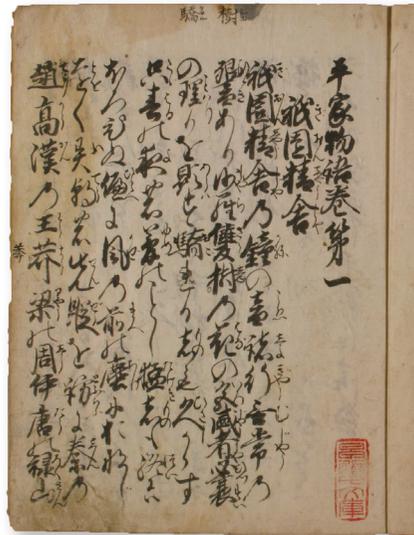
明月記 断簡 リ5 15647
藤原定家自筆
建暦3年(1213)11月11日・12日条
1軸

『明月記』は歌人・藤原定家(1162—1241)の日記で、歌学、政局の動向、宮廷社会の状況など幅広い内容が記され、随所に所感や告白も書き込まれており、史料としても文学作品としても貴重である。後世、定家の筆蹟が珍重され、本資料のような切断した原本が「明月記切」と呼ばれ、鑑賞の対象となった。



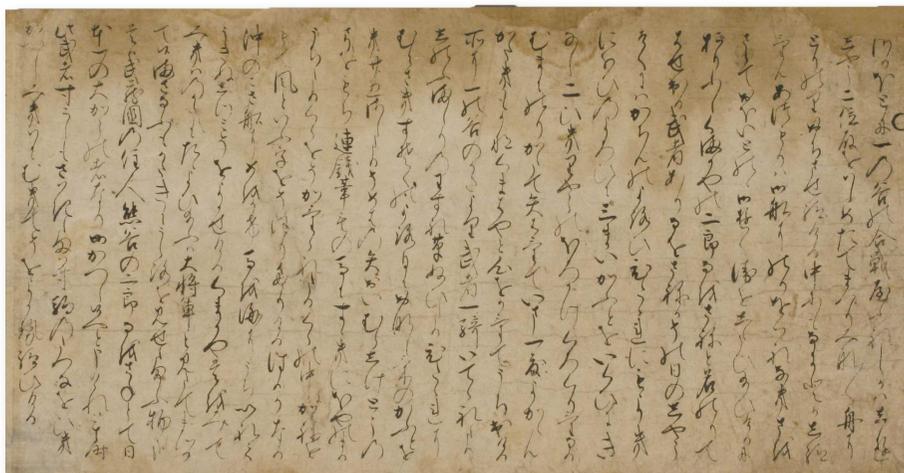
弄花抄 へ12 5090
三条西実隆編 室町後期写 6冊

室町時代に作られた『源氏物語』の注釈書(いわゆる「古注釈」)の一つ。牡丹花肖柏(1443—1527)の『源氏聞書』に三条西実隆(1455—1537)が補訂して成った。本書は一花堂乘阿筆と伝える室町後期の古写本である。



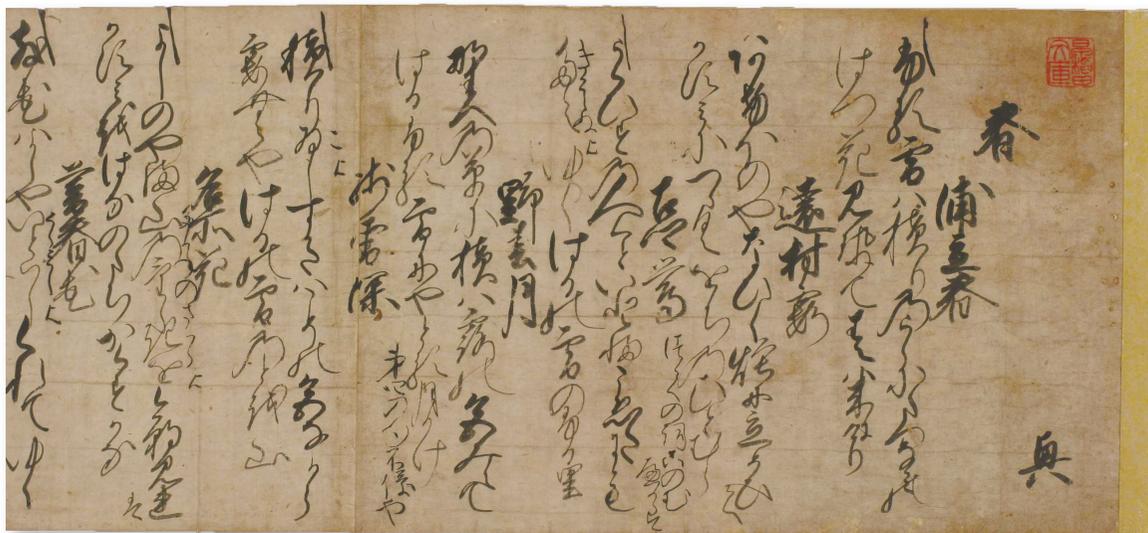
平家物語 卷第1-2、4-12
へ12 5098 江戸初期写
11冊

軍記物語の代表的作品である。平家の滅亡を描いた壮大な叙事詩だが、語り物であったため異本も多い。本書は裏返しに「慶長八年癸卯十一月八日城幸檢校所持」とあり、盲人に与えられた最高の官位である檢校という立場にあった、城幸という人物が所持していたことがわかる。琵琶法師の管理下に置かれた『平家物語』の具体例として貴重である。



敦盛絵巻 ち4 2084
伝飛鳥井雅親卿息女一位局書画
室町後期写 2巻

源氏・平氏の「一の谷の合戦」で、源氏方の武将、熊谷次郎直実(1141—1208)に討たれた平敦盛(1169—1184)の遺児が、法然上人(1133—1212)に育てられ、父の霊との対面を果たすという、いわゆる「小敦盛」の世界を描いた絵巻。本資料は歌人・飛鳥井雅親の息女、一位局の筆と伝えられる。



東寺金勝院本祐自筆歌巻 へ4 8079
 本祐撰 牡丹花肖柏加点批評
 室町中期写 1巻

本祐という東寺金勝院の無名の僧侶の和歌32首に、牡丹花肖柏が評詞・合点を加えたもの。肖柏は室町時代の著名な歌人・連歌師で、『新撰菟玖波集』編集では宗祇を支え協力した人物である。



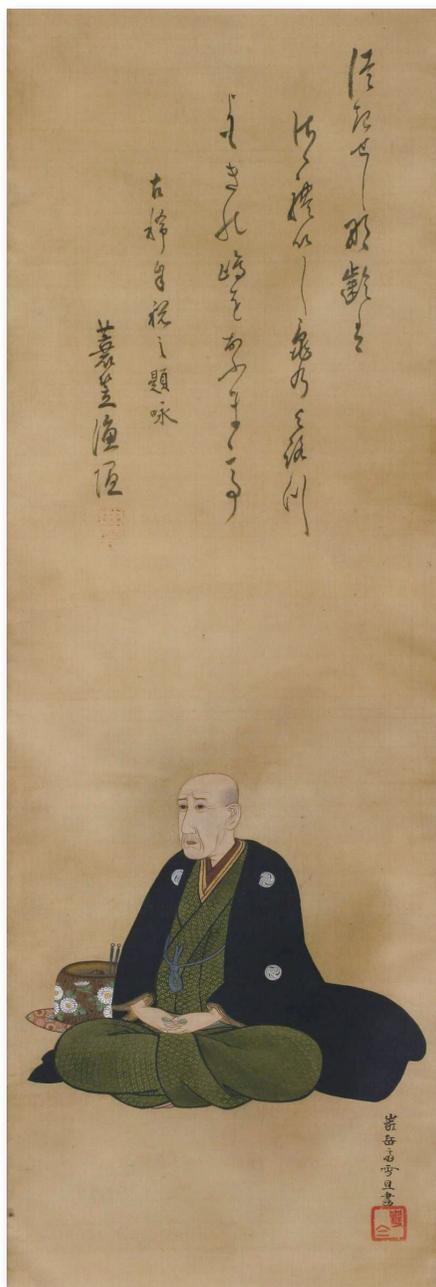
宗祇肖像并賛 文庫20 453
宮川松堅画 宗祇和歌賛
飛鳥井雅豊書 貞享4年(1687) 1軸

連歌の大成者、飯尾宗祇の肖像。宗祇の肖像画としては三条西実隆の賛を持つ最晩年の寿像(国立歴史民俗博物館所蔵)が有名であるが、本図はそれとは別系統の図像で、東京国立博物館蔵のものと同系統であることが注目される。宮川松堅(1632—1726)は松永貞徳門下の俳人・歌人であり、また飛鳥井雅豊(1664—1712)も江戸時代前期の歌人として著名である。



松尾芭蕉肖像 又6 9219
小川破笠(夢中堂笠翁)画
元文3年(1738) 1軸

漆細工師・小川破笠(1663—1747)が描いた松尾芭蕉(1644—1694)の肖像。破笠は伊勢に生まれ、のち江戸に出て芭蕉に俳諧を学んだ。生前の芭蕉を知る人の描いた貴重な資料である。



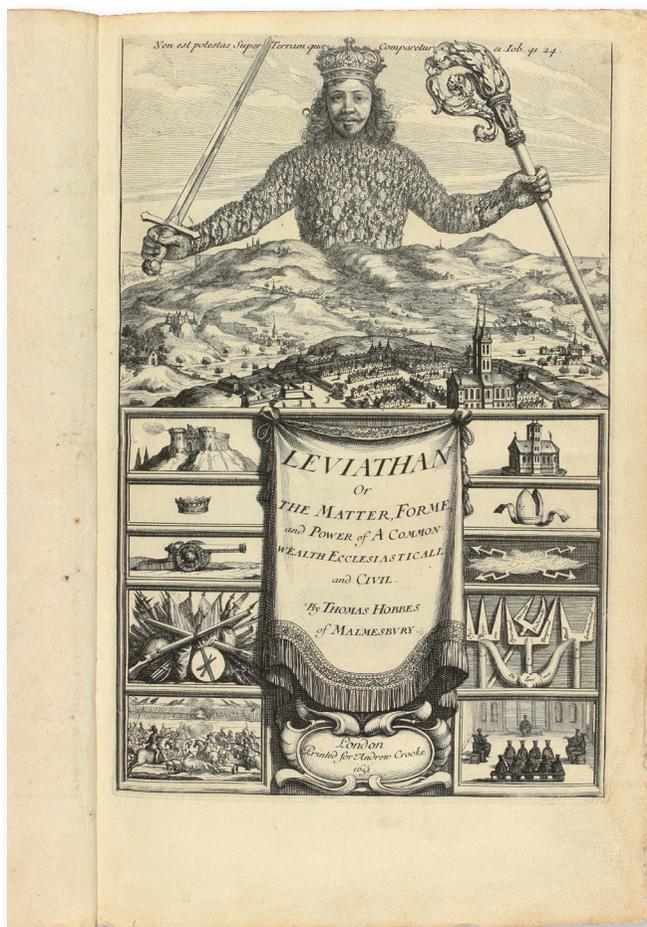
滝沢馬琴肖像並古稀自祝之題詠
又6 6622
長谷川雪旦(巖岳斎)画 馬琴自讃
天保7年(1836) 1軸

『南総里見八犬伝』、『椿説弓張月』などで有名な読本作家・曲亭馬琴(1767—1848)の古稀(七十歳)の肖像。馬琴が自ら古稀を祝った和歌を詠み、画は『江戸名所図会』の挿図で名高い巖岳斎雪旦(1778—1843)の筆になる。馬琴は『異聞雑稿』の中で、雪旦の挿絵を高く評価している。



ローマ聖歌手写譜 文庫33 247
 14世紀中葉-15世紀初頭
 ヴェラム 1葉
 Gregorian chant.

ローマ聖歌はローマ・カトリック教会で用いられる典礼音楽であり、一般にグレゴリオ聖歌として知られる。本資料は音符の形状や装飾などから、14世紀中葉から15世紀初頭にかけてのイタリア北部からオーストリア、南ドイツ地域で書かれたものとされている。



リヴァイアサン DB 4077
トマス・ホブズ著 1651年刊 1冊
Leviathan.

17世紀イギリスの代表的政治思想家ホブズ(1588—1679)の主著。彼は王権を神によってではなく、社会契約によって基礎づけた。扉絵の上部に描かれる王冠を戴いた国王の体は、よく見ると無数の人々によって成り立っており、ホブズがこの像に、社会契約によって形成される国家(コモンウェルス)をなぞらえていると知られる。本書は出版社のマークの形状および折丁A4の表にある木版の図柄により、真正初版本であることがわかる。



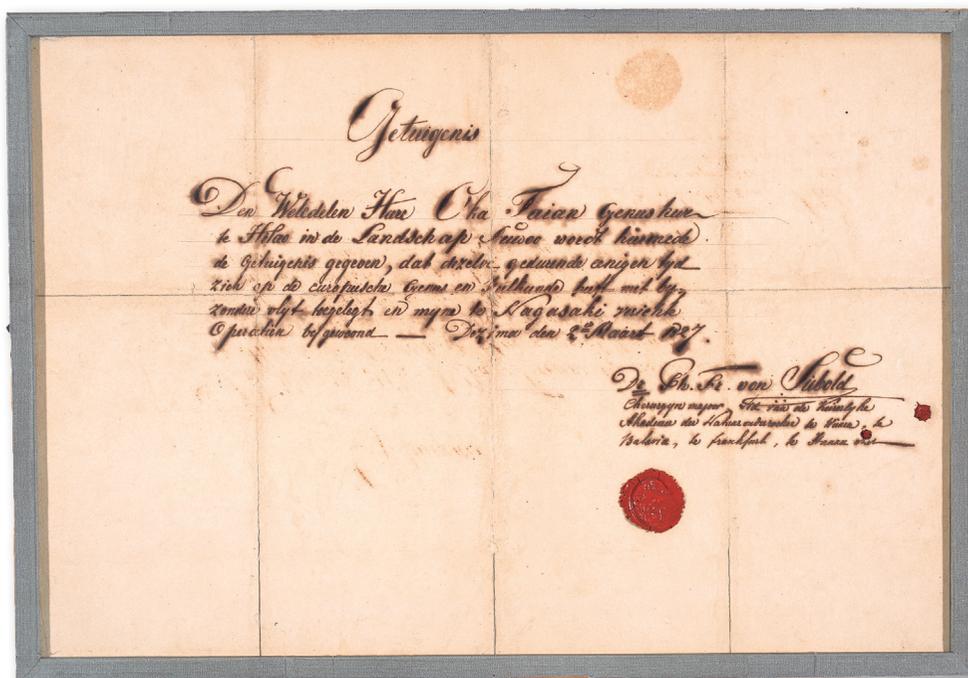
幸太夫と露人蝦夷ネモロ滞居之図
り5 9317
隆啓写 寛政5年(1793) 1巻

伊勢白子浦の廻船・神昌丸の船頭大黒屋幸(光)太夫(1751—1828)は、江戸へ向かう廻船が嵐のために漂流し、アリューシャン列島に漂着。約10年間の滞露生活の末に帰国した。本資料は、幸太夫がロシア使節ラクスマン(1766—?)とともに根室に到着した際の様子を描いたもの。



阿蘭陀カビタンヤンコックフロニホッフ一行図 リ5 15655 1軸

文化14(1817)年、出島オランダ商館長として赴任したブロムホフ(Jan Cock Blomhoff 1779—1853)一行を描いたもの。ブロムホフは、妻ティツィア(Titia)と、息子ヨハネス(Johannes)、乳母や下女などを伴って来日したが、遊女以外の女性の出入りを禁じる幕府との間で大きな問題となった。結局、妻子女性随行者は本国に帰国を余儀なくされたが、初めての西洋人女性の来日は世間の耳目を引き、出島の絵師・川原慶賀(1786—?)等により、夫妻を描いた様々な絵や版画が残されている。当該資料の製作者は不明であるが、ライデン国立民族学博物館所蔵の「ブロムホフ家族図」との関係の思わせる構図である点が注目される。



シーボルト医学証明書 岡泰安宛
文庫8 E21

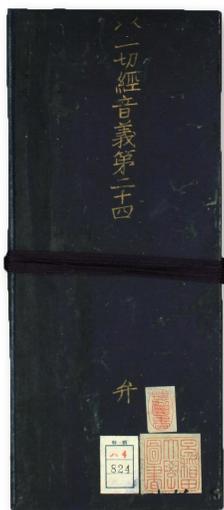
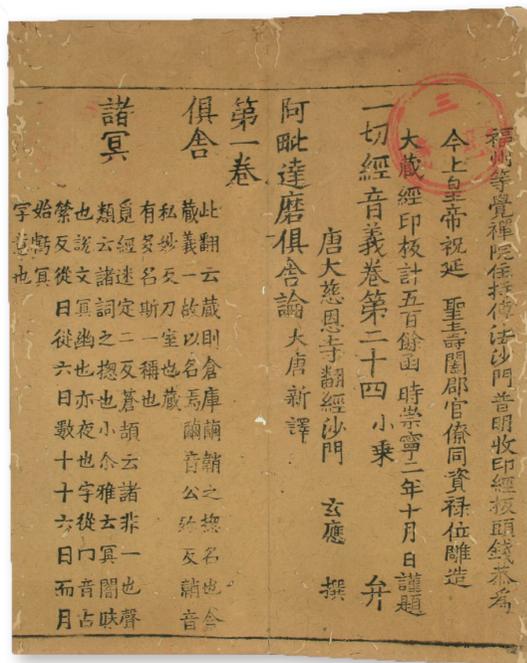
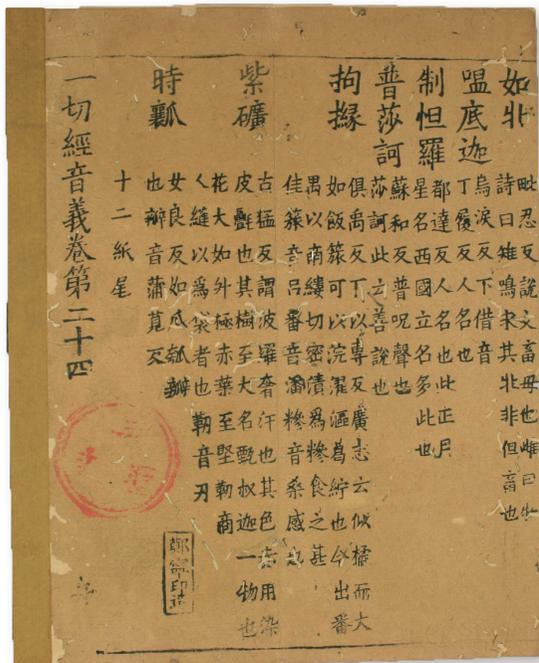
シーボルト撰 1827年3月2日 1額

ドイツ人医師P.F.B.フォン・シーボルト(1796—1866)が周防国平生村出身の医師岡泰安(1796—1858)に与えた外科技術証明書。泰安は文政9年(1826)長崎に赴いてシーボルトに師事し、弟岡研介とともに、シーボルトの高弟として知られた。シーボルトが与えた証明書は、当館所蔵のほか、西山砂保宛、高良齋宛のものが現存している。当該資料には“内科学、外科学を学び、長崎でシーボルトが監督した手術に出席したことを証明する”と記されている。



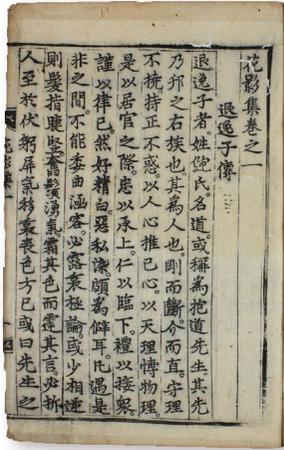
佐竹曙山蘭図 文庫8 H1
佐竹曙山(義敦)画 江戸中期 1軸

秋田藩主の曙山(1748—1785)は、家臣小田野直武(1749—1780)とともに、平賀源内(1728—1779)に洋風画を学んだ人物である。本図はたおやかにびく東洋蘭を、陰影を用いた西洋画法でとらえている。しっとりとした葉の艶めきには、アラビアゴムを用いた新来の技法を取り入れた可能性もあるという。まさに和洋折衷を特徴とする秋田蘭画の代表作の一つである。



一切経音義 卷第24 ハ4 824
 玄応撰 崇寧2年(1103)刊 零本
 宋版 東禅寺版大蔵経本 1帖

東禅寺版大蔵経は、北宋元豊3年から崇寧2年(1080—1103)にかけて刊行された大蔵経で、木版印刷の大蔵経としては史上2番目のもの。本資料は唐初期の僧・玄応による音義書で、現存する宋版は極めて稀少である。



花影集 卷之1-4 へ21 1235
 陶輔撰 万曆14年(1586)再刊本
 朝鮮装 2冊

明の陶輔(1441—?)が正徳年間(1506—1521)に編した小説(説話)集で、現存するものは当館所蔵のものが唯一である。所収の説話には後世の小説集等に採録され広く伝播したものもあり、説話文学研究の貴重な資料である。本資料は朝鮮使が嘉靖年間(1522—1566)に持ち帰った本によって再刊されたもので、綴じ穴を5つあけた「朝鮮装」と呼ばれる装幀がなされている。



早稲田大学図書館 特別資料室内 貴重書庫

早稲田大学中央図書館開館25周年記念展示

発行日：2017年3月17日 発行者：早稲田大学図書館